

講演

愚に還る

—新しい時代の生き方—

町田 宗鳳

(一) なぜ、いま『イワンの馬鹿』に学ぶのか

財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センターの公開講演会にお声を掛けていただきましてありがとうございます。公開講演会ですので、今日はあまり学問的な話ではなく、きわめて打ち解けたお話をさせていただきたいと存じます。

私は最近『愚者の知恵』(二〇〇八年一月初版・講談社+α新書)という本を書きました。私はこういう物語風に話を展開していく本を書くのは初めてでしたが、楽しく書かせていただいた本です。その動機は、いろいろ文明論とか宗教間の対話とか、そういうことをテーマにした仕事をしていく上で、結局何が大事かと言うと、人間の謙虚さ、それぞれの人間の心の大掃除をしないことには、いくら高邁な話をして世界平和は実現しないと、そういうふうを感じるようになったものですから、こういう本を書いてみたくなりました。

「はじめに」の所をご紹介します。

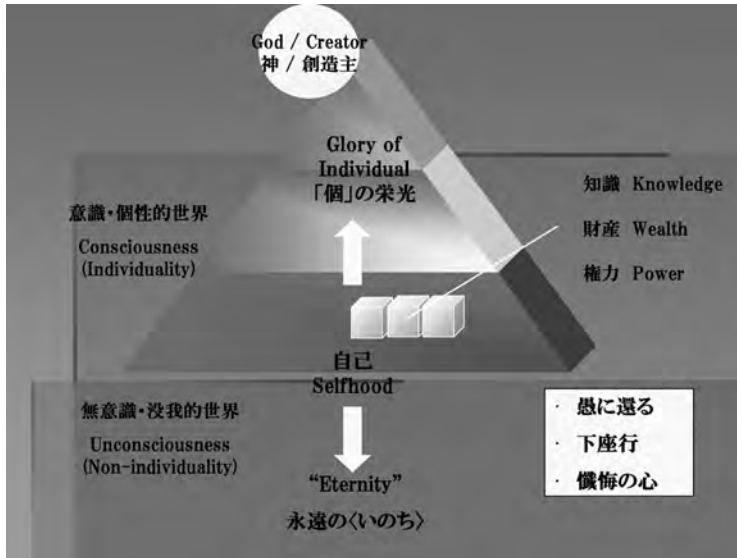
ロシアの文豪トルストイの名作のひとつに『イワンの馬鹿』をはじめとする小さな民話を綴った作品シリーズがありますが、その内容は幾度読み返しても飽きがこないほど含蓄があります。トルストイ自身にとつても、自分に歴史的な名声をもたらすことになった『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』などの大作よりも、これらのごく短い民話の方がはるかに価値のあるものだったのです。人もうらやむような名声と財産を手に入れてから、逆に人生の空しさに苦しむようになったトルストイは、ようやく五十代後半になって、それまで拒絶していた「神への信仰」に生きがいを見出すようになりました。その信仰の中で見出したものを、トルストイは誰でもわかる民話の形式で表現しようとしたのです。実際に信仰に光を見出してからのトルストイは、まるで「イワンの馬鹿」のように野良着を身につけ、畑を耕し、肉食を避け、粗食に甘んじるような生活をはじめていたのです。そのようなトルストイは、若い時に無頼漢でもあった自分が、知らず知らずのうちに特権階級の仲間入りをしていることを深く恥じ、つねに自分の領地と著作権から入る収入の一切を放棄することを望んでいました。しかしそれが周囲の反対でできないことに、非常に苦しみます。そして、ついに八十二歳という老齢で家出をし、列車の中で肺炎にかかったまま、小さな駅の構内で亡くなったのです。わたしはそれを惨めな死とは思いません。彼の魂がそのような死を選んだのです。きっと彼の魂は天使に導かれて、一直線に天国へ昇っていったはずですよ。

そして後段に、翻訳者の北御門二郎さんを紹介しています。この方は東大を出てから兵役拒否して、大変危ない目に遭いながらも、熊本の上奥で百姓として過ごし、トルストイの作品を訳し続けた方です。その方の言葉を紹介させていただきました。そして、続けて私は次のように書いています。

人間がこの世に生きるということは、並大抵のことではありません。精神的にも肉体的にも、多くの苦痛が伴います。ときに自らの命を殺めたくなるほどの場面もあります。それほど厳しい人の世ですが、かといって、いつも悲愴な顔をして暮らすというのは、感心しません。つねに心に重くのしかかることがあるというのは、エゴがあるからです。エゴというのは、たとえてみれば腎臓などに結石があるようなものです。結石があれば七転八倒の強い痛みを招きます。そして放置すれば、命取りになります。エゴというのは、それほど恐ろしいものなのです。人生が辛いというのも、じつのところ、人生そのものに原因があるのではなく、エゴが人生を辛くしているのです。しかしエゴがあらゆる不幸の原因とわかっていても、そのエゴを捨てることができないうのが、わたしたち人間です。救いがたいまでの凡夫の愚かさです。そんな愚かなわたしたちにも、一歩だけ神に近づける方法が、ひとつあります。それが何かといえは、自分の愚かさに気づくことです。それに気づいているのと、気づいていないのでは、大きな違いがあります。なぜなら、人間が他者に見せるあらゆる傲慢は、強烈なエゴを持ちながら、それを自覚できないままでいる自分に対する無知に原因しているからです。自分に対して無知な人間こそが、善人のふりをしながら、他者に対して、もっとも冷酷なことをやってのけるのです。『イワンの馬鹿』とそれに連なるトルストイの作品は、どこまでもエゴイスタックなわたしたち自身の姿を、ありありと映し出してくれる心の鏡だと言えます。ですから、この本は先を急がずに、しみじみとゆっくり読んでください。そうすれば、鏡に映る自分の姿が、やがてはつきりと見えてくるはず

(二) 没我的な世界の価値

そういう書き出しで始めているこの本を前提にお話をするわけですが、私は「文明」というのは、



図①

この地上のピラミッドという譬え方をしています（*図①参照）。近代文明においては特に、知識と財産と権力を積み上げて、人よりもより大きくて高いピラミッドを私たちは作るうとしているわけです。一神教的なコスモロジーの世界では、その上に絶対者としての神、クリエイターを仰いでいます。イマゴ・デイ（*imago Dei*）「神の似姿」に造られた人間、その栄光を勝ち取るのはこのピラミッドの頂点に立つ人間です。

欧米社会の組織構造を見ていきますと、組織のトップに立つと、大変な権限が与えられますし、また法外な報酬も与えられていますが、私たちはアジアに住んでいても、この文明の形態に入っておりまして、上昇志向、野心を非常に大事にしております。ただ、この頃の若者はこの上

向きの矢印がちよっと弱い気がいたします。その方が物足りない感じもいたしますが……。

問題は、地下のピラミッドというか、ピラミッドの基礎づくりがしっかりできていないということです。無意識、没我的な世界というものの価値を忘れてしまった。明治以降の近代化の中で、あるいは戦後の経済復興の中で、わたしたちはこの目に見えない世界の価値観をまことにおろそかにしてきて、そこに日本社会の危うさがあるように思います。

毎日のように日本で悲しむべき人身事故が起きているというのも、言ってみればこういう文明の形態が生んだ歪みと言えます。やはり目に見えない世界の価値観というものが全く感覚できない人間が増えてしまったのです。

日本の文化というのは、やはりこの「愚に還る」とか「下座行」とか「懺悔の心」とか、そういうものを非常に大切にしてきたと思うのですが、それが現代においては本当に無視されている。家庭でも学校でも子供たちに、「頑張って勉強しなさい。いい学校に行きなさい」というぐらいの価値観しか与えていないところに非常に心寂しいものを感じます。柔道とか剣道とか、華道、茶道でもそうですが、「道」の付いている日本文化は、別に出家しなくても世俗のまま自己を磨く道、そういうものをしっかり育んできたのが日本の文化です。そういうものも近代スポーツ化して勝敗を非常に重視してしまうものにしてしまった。己の足の置き場、基となる精神が分からなくなってしまうというふうに感じます。

近代文明で、やはりピラミッド型の思考形態を持っているものですから、どうしても地上につくろうとするものも、このように左右均衡の非常に頑健なものをつくらうとするわけです。人間の持っている潜在意識の現れがこういう建築様式になってきています。

モスクワにスターリン建築（*写真①）というのが七つから八つございます。無神論の共産社会でもなぜこういうものができるかというところ、私の解釈では「共産主義も宗教の変形」であると言えるの



写真①

ではないでしょうか。神は否定するけれども、政治的な権力者を神のように崇めるといふ心の動きがあります。

赤の広場に行けば、スターリン廟がありますし、天安門広場に行けば毛沢東記念館があります。そこには、それぞれの遺体が永久保存されています。あたかも生き神さまのように扱われているわけです。やはり共産主義というものが一つの宗教であるという証拠だと理解しているわけです。

せ
(三) 日本は文明論的な役割を果た

近代文明は、私たちに大変大きな恩恵をもたらし、われわれ全員がその恩恵に浴しています。しかし、その半面、大規模な機械力による自然破壊あるいは化学物質による自然



図②

壊というものを深刻に進めてしまった。あるいは貧富の差を生じています。日本も最近、格差社会と言われていますが、まだまだ日本なんかやさしいほうで、世界的なスケールで見れば、貧富の差というのはもう絶望的なものがあると思います。

サウジアラビアにまいりましたが、あの国はオイルマネーが入って非常に潤沢な国ですが、庶民は極めて貧しい。リヤドにも他の都市にもスラムがありますし、王族や王族を取り巻く一部の特権階級はまことに贅沢な生活をしています。あの産油国でも貧富の差というものは非常に大きいものがあります。南アジアとかアフリカにも足を運びますが、先進国の中流階級と比べても、まことに悲惨な生活が展開しています。

このような方向でいくと、聖書に出てくるバベルの塔（*図②）のお

話のように、文明が崩壊する危険性は作り話などではなくて、かなり現実味を帯びていると思います。

私は近代文明を「分裂の文明」と呼んだりすることがありますが、それはここに挙げたような一神教と多神教、聖と俗、人間と自然、科学と宗教、個人と共同体、文化と文明、こういうものは切っても切れない融合関係にあるものですが、何か水と油のように分けてしまっている。実に敵対するような関係に置いてしまっています。それが近代社会の一つの大きな特徴だと思うのです。これらを融合させていかにないことには新しい文明のパラダイムというものは生まれなし、そういう大きな仕事を

する役割は、実は私は日本にあるのではないかと思っております。
日本はやはり明治以来、西欧近代を学んできました。それと同時に縄文時代以来からの精神文化というものもまだ継承し、この両方の文明の在り方というものを理解しうる。これからの日本というのは単なる経済大国としてではなくて、もっと文明的な歴史的な役割があるのではないかと感じております。

(四) 潜在意識以下の大掃除が必要

図①と写真①を用いて、大きな文明の枠組みとしてお話をさせていただきました。そのピラミッドの構造は実は人間の心の構造（*図③）でもありまして、私たちはこの円錐形の意識構造のごく先っちょの意識のところを判断をして行動をしています。いろいろなことを比較して、「良い」とか「悪い」とかそういうことを言っています。この意識というのは本当に氷山の一角で、その下に潜在意識、さらに下がっていきますとユング心理学で言う「個人無意識」とか「普遍無意識」というものがあります。これは唯識のマナ識とアラヤ識に相当すると考えています。

今日の世界における、世界平和とか、文明間の対話とか宗教間の対話というのは、この表層意識



図③

のレベルで起きてしまっている
で、世界が変わらない。もっともつ
と深いレベルで私たちは対話を重ね
ていく必要があると、そのように感
じています。

それにはまず、私たち自身の意識
の大掃除をしなきゃいけないと思っ
ています。いくらこの意識のところ
で、「私は品行方正に真面目に生き
るんだ」と、「人には親切に思いや
りを持って生きるんだ」と言っ
ても、潜在意識以下が濁っている、
全然日常の行動というものは変わ
りません。

私自身が禅の世界に長くて坐禅
というものをしてきました。本来は
坐禅というのはまさにマナ識とかア
ラヤ識を浄化していく、そういうと
ころに目的があるわけですが、禅の
みならず伝統的な宗教の修行形態と
いうのは形骸化してしまい、浄化装

置がほとんど働かなくなっているというのが、私の実感です。

一つの事例をお話ししましょう。私もいろんなことをやっていますが、私の友人にイエローハット創業者で、今は相談役の鍵山秀三郎さんがおられます。あの方は全国にトイレ掃除を広められて、私もよく学生たちと参加させていただいています。学生にとってトイレ掃除は非常に、的確に潜在意識のお掃除に役に立っていると感じています。人間は、もともとと深いところの意識を浄化していかないことには、個人的な面では幸せにはなれないし、人類社会が平和に近づくということもあり得ないという印象を持っています。

ちなみに、この普遍無意識（*図③）というのは、一応図としては底を書いています。底はなく、無尽蔵の闇のエネルギーが底にわたかまっています。それを何とか転換していかないことには、幸福な生活も平和な社会も実現しません。

(五) 恐るべし記憶の刃

私が言いたいことをまとめて書いておきます「恐るべし記憶の刃」という一文を紹介しましょう。

今、あなたの身の上に何か好ましくありません。たとえ、あなたに何ら悪意もないのに、あなたのことを攻撃する人物が現れたとします。それは誰のせいでしょうか。あなたの、あるいはあなたを攻撃する人物の責任でしょうか？ 答えは、そのいずれでもありません。真犯人は、あなたが心の奥底に抱え込んでいる否定的な記憶です。

人間関係だけではなくて、仕事の事でも肉体的なことでも、何もないところに災いをもたらすのは、つねにあなた自身の否定的な記憶です。どこに店を開いてもうまくいかない、ガンが再発してばかりいる、というのなら、店の立地条件を調べたり、健康診断をしたりする以前に、あな

た自身の記憶の資質をCTスキャンにかけてみる必要があります。

仏教でいうカルマも、単にこの記憶のことを意味します。しかし、この記憶はやたらと根が深く、簡単には抜き去ることができないのです。宗教に難行苦行が付きものなのも、その記憶を消し去る訓練がいかに大変か、昔の人も知っていたからです。

いわゆる苦手意識というのも、浅いレベルでの否定的記憶のことです。唯識という習気（じっけ）というのも、そのような思い癖のことですが、人生には苦手意識といった生易しいものではなく、その人の一生を転覆させかねない破壊的な記憶が蘇ってくることがあります。人を殺してしまうのも、殺されてしまうのも、そのためです。

ですから、平生からそのような否定的な記憶に意識を占拠されないような心がけが大切となります。仏教的セラピーである内観療法では、両親との関係を中心に、過去の事実を思い出すことによつて、自分の生い立ちにまつわる記憶の大掃除をします。

ハワイ土着の心理療法であるホ・オポノポノでは「愛しています。ごめんなさい。許して。ありがとう」という言葉を繰り返し唱えて、記憶を浄化していきます。そして自分のことのみならず、周囲の人々の問題を解決してしまふのです。

SOHO禅で思いつき「ありがとう」と唱えてもらうのも、健康断食で「心と体のデトックス」をしてもらうのも、目的は「否定的記憶を消す」という一点にしかありません。偏食、過食、拒食を招いているのも肉体の否定的記憶にほかならず、それを払拭してしまえば何でもおいしく、しかも少しの量で満足できるのです。

この「否定的記憶」を大掃除して、当たり前の生活を平々凡々と、嬉しく楽しく生きる人を私は「タダの人」と呼んでいます。「タダの人」は、自分に対するこだわりがないので、愛の人でもあります。そしてその愛の人こそ「イワンの馬鹿」なのです。

こういうふうには書かせていただいています。この最後の「タダの人」がなかなか難しくなれませんが、著名な方とか高学歴の方はやたらとプライドがありますから、その時点で「タダの人」失格です。反対に、庶民として別に名もないし、それほど目立つ立場に置かれていない人はタダの人になるチャンスが大いにあります。しかし、その庶民も、俺はだれそれよりも良い会社に行かなかつたとか、給料が安いとか、ひがみ根性を持った瞬間にタダの人失格となります。なかなか綱渡りのなことです。

私の周りを見ても確かに、タダの人がおられます。決して著名な方でも何でもなければ、素晴らしい境地で生きておられる方がおられます。そういう人こそ「タダの人」です。こういう方にはなかなかありません。否定的記憶で自分の心を占拠されている限りは、百パーセント消すのは無理だと思います。その割合が相当減っている人は境涯がいいのです。

(六) 誰が不幸を呼んでいるのか

ところで、最近若者に「誰が不幸を呼んでいるのか」ということを問いかけています。自分の否定的な記憶(トラウマ)が否定的現象を呼ぶのだと言うことを教えています。

最近の若者の特徴の一つとして、非常に甘えがあるという気がします。何があっても他人のせい。親が悪いとか、先生が悪いとか、世の中が悪いとか、人のせいにして自分を振り返る力を持たない若者が非常に増えているような気がします。若者だけではなく、中高年にも増えているように思っています。現代人の心理の特徴には「負け犬根性」があります。私は、日本ほど恵まれた国も少ないと思っています。確かに、日本にもいろいろ問題はありますが、相対的に見た場合かなり恵まれた社会に私たちは生きています。

私は北欧にもよく行っていますが、確かに美しい自然、すばらしい風景が北欧の国々には広がっています。しかし、冬場は、美しいといっても、惨めな冬という感じがします。長い、長い夜のある寂しい世界です。また、福祉国家で老齢年金も充実して医療もお金が掛からない、教育もお金が掛からない国ですが、国民全体にやる気のない感じがしています。大学の関係でその実態を垣間見たことをお伝えしますと、大学教授に秘書はいますが、その秘書は週のうち二日ぐらいしか出勤しない。「何故？」と聞けば、「いやみんな勝手に年休を取って来ないんだ」と。「退職勧告をしたらどうか？」と言ったら、「そういう事はできない社会なんだ」という答えです。そこには勤労意欲とか働く喜びとかが全く感じられません。職員はいるのですが、全然出勤して来ない。可哀そうな状況です。北欧社会の一面ですが、若者たちの様子を見ても余計にそういう傾向があるように思えます。

そういう意味で日本はまだ捨てた国じゃないと思います。問題は、凡人であること、「夕ダの人」であることの喜びを忘れて、やたらと負け犬根性を持っている人間が増えていることです。特に若い世代にそのような傾向がある。そのような人間が増えてきて、連続通り魔事件のような悲惨な事件を引き起こす人間が生まれ、社会が病んできています。その原因は「ひがみ」です。アル中や家庭内暴力、引きこもり、犯罪、こういうものがまん延してしまっています。日本は世界一平和な国だと思っていますが、日本で最も平和でない場面があるとしたら、それは家庭です。日本の家庭は戦場と化している所が多い。非常に悲しいこの現象は「ひがみ」が原因です。

皮肉なことに、あの紛争のまっただ中にあるアフガニスタンとかイラクでは家族の仲が良いように感じます。弾丸の飛び交う中で家族が支え合って生きているわけですから、むしろ戦乱の世の方が家族の絆が強くて、日本のように非常に恵まれた社会では、反対に家族の団結力というものが薄まってしまっているという悲しい面があります。教育改革とかいろいろ言われておりますが、人間にとって何が大切かと言うと、家庭の団欒、お父さんとお母さんが仲良くして、そして子供を育てていくとい

う平凡なことを大切にすることから始めないとどうしようもないように思っています。

(七) 内観療法

吉本伊信という方が奈良の郡山で始められた仏教的なセラピーで内観療法という療法があります。西洋のサイコセラピーは分析をしますが、これは一切分析をしない。分析はしてはいけない珍しいセラピーで非常に単純です。内観研修所は全国に二十五カ所ありますが、そこに七泊八日宿泊しての遮断療法です。まず母（または母親に代わる人）に対して「世話になったこと」、「して返したこと」、「迷惑を掛けたこと」の三つの設問に対して答えていくのですが、これは本当に良いセラピーです。

私も若い時にしたことがあります。和室に屏風を立てて、そのコーナーで朝から晩まで母さんのことを思い続ける。単に、お母さんにお弁当を作ってもらったというような、そういう漠然とした思い出ではなくて、どういうおかずを作ってもらったのか。お弁当箱に何が入っていたのか。服を繕ってもらったのはどのように繕ってもらったのか。お母さんがどのような柄の着物を着ていたのか。どんな匂いをしていたのか。そこまで思い出していくわけです。遮断療法ですから、一日中電話もなく、人ともおしゃべりしない。たいていの場合、幼稚園ぐらいから三年刻みで現在まで内観していくわけですが、相当これは鮮明に記憶が蘇ってくるわけです。その事実を思い出すだけで、自分がいかに多くの人たちの愛に支えられて生きてきたかということに自覚する、という内観療法です。

この療法が最も効果が出るのは、刑務所で服役している人たちです。彼らが内観療法をした場合に、最も大きな更生の機会になり、全国の刑務所では、ほとんどの所でやっているようです。少年院でも効果を大きく上げています。親にひどい仕打ちをされた、あるいは親に捨てられたと、そう思っている人たちも、実は多くの人たちのご恩を受けて生きてきたということを、理屈ではなしに体で納得し、その瞬間に更生が起きるわけです。

(八) シブン(自分)を見詰め、許し、褒める、信じる

私の知人で青山学院法学部の石井光教授がいます。ドイツ語に非常に堪能な彼は、二十年来ヨーロッパでこの内観療法をやっております。もう既にヨーロッパに数カ所の内観研修所ができたと言っています。ヨーロッパの人々は、非常に強い個人意識を持って生きていますから、いろんな心の重荷を抱えています。ですから非常に大きな効果が上がっているそうです。石井さんの弟子の全員がヨーロッパの人たちですが、その孫弟子もできて、どんどん今、広がっているようです。

ある実際にあった話ですが、お兄さんに強姦されたという女性がいた。その女性の心の痛手は相当大きいものであったでしょう。女性として、信頼する兄に犯されたという深手の心の傷が、どんどんどんどん意識の深い所に入っていく、結局この人は膠原病になってしまった。内観研修所に来た時は、歩くことも出来ず、担架で運ばれてきたそうです。ところが内観をやることによって、ほとんど治療ができない神経病の一つで難病といわれている膠原病ですが、何と帰りは歩いて帰ったそうです。その兄を許すということができた瞬間に歩くことが出来、治ったという事例です。パーキンソン病も治ったケースもあるそうです。ガンが治るケースはよくあるそうです。

われわれが肉体的疾患と知っている多くの病気は、実は心のストレス、しかも強度のストレスから起きている病気が多く、それを何十年と抱えて生きている人がいますが、内観療法によってその心のしこりをほぐした瞬間に、その肉体的疾患が消えてしまうというケースが非常に多い。これは内観療法の報告であちこち見受けることです。

もう一つ驚くことは、内観の体験者の手記を読んでいますと、一週間して出て来た時に風景が輝いて見えた、という報告が多い。これは、坐禅を朝から晩までほとんど眠らずに一週間行う「大接心」をやっていると、まれに起きる現象です。山が光って見えるとか、木が輝いて見えるとか、これは意

識の掃除ができた時にそういうことが起きるのです。長くは続きませんが、瞬間的にそういうものを見てしまう。それは自分の意識の浄化が相当進んでいると言えます。

坐禅をしなくても内観療法で屏風の中にいて過去のことを思い出しているだけで、それが起きるといふのはすごいと思います。一般人で、坐禅もしたことのない人が内観療法をやることによって、そこまで潜在意識の大掃除ができるということに相当ショックを受けています。すごいことです。

否定的な記憶を消すと世界は一変します。学生とともにトイレ掃除も一緒にやりますが、内観療法も勧めています。特に大学院生あたりの学生に勧めています。自分（ジブン）を見つめる、自分（ジブン）を許す、自分（ジブン）を褒める、自分（ジブン）を信じるというプロセスを経ない限り、本音からの「幸せだな」という声が出てこないと思います。

（九）「ありがとう」精神が幸運を呼ぶ

『Love Me : もっと自分を愛してあげて』（ハート出版）という変なタイトルの本を書きました。若者たちにつづ病が多く、自殺する人も、リストカットする女の子も非常に多くいますが、これは彼ら向けに書かせてもらった本です。本当に日本という国は、平和で穏やかな国ですが、心は病んでいます。若者向けのメッセージとして、「人生は運次第！」「大事な時に誰と出会うか」「進学、就職、結婚、仕事という節目節目に誰と出会うか」で大きく変わってきます。

学歴や才能というのはどちらかと言うと二次的なもので、一次的なものやはり運だと思えます。私の学歴は恥ずかしながら高卒です。高卒の人間がどうしてアメリカの大学の大学院に行けたかという、その時に必要な人に出会ったから行けたわけで、本当に恵まれていたと思います。よき人との出会いです。

ですから、あの小室哲哉が借金抱えて詐欺という犯罪を犯してしまった。借金抱えるのはいいので

すが、その借金を抱えた時に誰と出会うかが問題で、良識ある人に出会っていたなら、彼は借金苦から逃れたはずです。その時に詐欺をしようという悪知恵を授ける人に出会うから、あのような道を歩んでしまった。ミュージシャンでアーティストですが、金銭感覚が麻痺していたのでしょう。彼が人生の岐路に立たされた時に正しい友に出会わなかったというのは、彼の不徳のなすところと言えます。やはり人間というのは徳とか運が非常に大きなものであるということです。

最近、日本一の個人投資家といわれている竹田和乎さんという方にお会いしました。竹田さんから会いたいと電話がかかってきましたのでお会いしました。名古屋で「たまごボーロ」などを製造販売されている竹田製菓の社長で、お菓子業も成功しておられるのですが、個人投資家・日本一として有名な方です。上場大手企業百数十社の筆頭株主とも言われています。

その竹田さんにお会いしてびっくりしました。顔を拝見したら「えびすさん」でした。それはもうふくよかなお顔でした。いかにもお金持ち。何百億というお金持ちだと思えますが、竹田製菓の本社に行ったら、一階は竹田さんが選んだ古事記の時代から明治までの日本の偉人百人の由緒が記載されて祭られていました。その偉人の一人ひとりの顔を大きな金貨に刻んで、百ほど並んでいるわけです。そして、それぞれに掛け軸を掛けて、竹田さんの詩が書かれていました。実に面白い人です。

その竹田さんがおっしゃるには、「ありがとう」の精神が幸運を呼ぶ！「ありがとう」の精神が大事だ！という信念で、毎日、毎朝、四十分かけて三千回の「ありがとう」唱えています。毎朝四十分です。竹田さんは、この「ありがとう」の言葉が人間を良くしていくというお考えです。竹田さんは今、散々お金を稼いだものだから、これからは「貯金の時代」ではなく徳を蓄える「貯徳の時代」に入ったと言われています。若い経営者を集めて「貯徳塾」という勉強会を開いておられ、その勉強会の講師として、私も呼んでいただきました。

竹田さんは、また面白いことをおっしゃっています。「ワクワクする心で暮らしていなさいかん」

と。常にワクワクする心。ああ、その株が落ちたとか、そんなことで心を暗くしているようでは駄目だ。もう常にワクワクワクワクする気持ちで暮らしていく。仕事もワクワク、遊びもワクワク、投資もワクワクと。そうしたら物事はうまくいくと。そのワクワクする心を皆さんにお伝えしたいというのを、一生懸命、今おっしゃっています。

(十) 下座行が世界を変える

人が嫌がる下座行を率先してやる勇氣。これもやはり運を作っていく大事なキーポイントになると思います。ゴミ掃除とかトイレ掃除とか地味なボランティア活動を、もともとと大切にして、特に子供たちに伝えていく必要があると思います。

先ほどもお話した、イエローハットの鍵山秀三郎さんはトイレ掃除は当たり前。毎朝、中目黒にある本社に、六時半から社員、幹部の全員が出勤してきて、一年三六五日、会社の中はもろろんのこと、付近の住宅地、商店街、徹底的にお掃除されます。すごいことです。立派な本社ビルの一階は全部ゴミ分別所です。掃除道具は芸術品のように並んでいます。それぞれ工夫して開発された発明品ですし、ペットボトルでも拾ってきたら全部洗ってシールを取って、キャップをプラスチックの種類によって分けられています。缶でもスチール缶、アルミ缶、全部分別されており、生ゴミ、燃えるゴミ、段ボールもちゃんと同じサイズに切つてきれいに束ねて縛つてあります。それはもう芸術の域です。一階ゴミ分別所は臭いひとつしません。毎日のようにゴミ回収業者が来ますけれども、全然苦勞はないわけです。また、近くの公園に行つて草抜きをし、トイレ掃除をして、ゴミを拾つてリヤカーを引つ張つておられます。それを毎朝やつておられます。このようなことを、日本の企業が全部やってくれたら、日本の経済も変わっていくと思います。

このような人の嫌がること、下座行を率先してやることこそが世界を変えたいと思います。文明間の

対話セミナーのような国際会議に出席するVIPの方が、その国のスラムに行つて、トイレ掃除した時に世界は変わると思います。

洞爺湖サミットの直前に、大阪と京都で、「G8世界宗教指導者サミット」がありました。世界中から三百人ぐらいの宗教家が、いろんな装束を着て参加しておりました。私も議長の人として参加させていただきました。そこで面白かったことは、参加者全員を観光バスに乗せて「あいりん地区」に連れて行ったことでした。これは主催者の考えで行いましたが、「あいりん地区」に連れて行って、日本にもこういう貧しい現実があるんだという現実を見ていただきました。出席者の皆さんはびっくりしていました。

その宗教者サミットというのは、大阪大学の建物を使つたり、あるいは関西地区の寺社仏閣を使つたり、あるいはいわゆる新興宗教の本部をお借りして運営しました。宗教団体の本部というのは、目をむくような建物で、本当に豪華絢爛、この不景気の世の中、あのような豪華な建物を持っている宗教団体がいくつもあるのは驚きました。新興宗教団体というのは、どこもすごくお金がある感じでしたが、そういういろいろな現実も見ていただいて会議を進めていきました。

その一方で、同じ都市の中で「あいりん地区」のようなものがあり、そういう現状を見ていただいたのは良かったと思います。ただ問題は、皆さんが装束を着たまま見学し、通過して行ったことです。それを見て残念だなあと思いましたが、あそこで皆さんが衣を脱いで、「あいりん地区」のシェルターの床掃除をするとか、トイレ掃除をするとか、病気で寝込んでいる人の背中をさすってあげるとか、そういうことをしていたらすごいことが起こったかもしれせん。世の中が変わっていったと思います。

会議で理想論ぶつても変わらない。宗教指導者の国際会議によく呼んでいただいて、誠に光栄なことですが、それが私の仕事のひとつだと思つていきますから出席しますが、私は社会のエリートと言われる

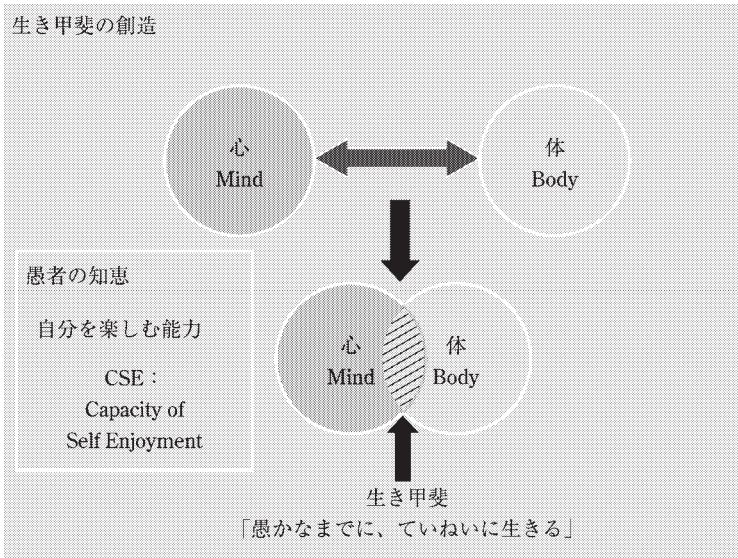
る人が下座行をしないと、世界は変わらないと、そのように考えています。大学でも学長、理事長の立場にいらつしやるような方が、毎日ゴミ掃除するとか、トイレ掃除するぐらいになったら変わっていくでしょう。トップにいる人が一番下に下る。洞爺湖サミットなどで何十億とかいう金を使って開催してもあまり世界は変わらない。折角、北海道に世界先進国の首脳が集まったのですから、すすきの盛り場に行つて、朝、酔っぱらいが吐いたへドでも掃除するとか、そういうことを世界のリーダーがやった時に世界は変わると思っています。

鍵山さんのグループは名古屋の栄という盛り場や東京の歌舞伎町を毎月一回掃除しておられますが、すごいです。私も一度参加させていただきましたが、明治通り辺りのドブの蓋を開けて、道に這いつくばってドブ掃除されています。歌舞伎町のくさいドブのお掃除です。鍵山さんを筆頭に地べたに這いつくばって、素手で、掃除をされています。ドブの中にはいろんな物があります。タバコの吸殻ぐらいならまだしも、いろんな物が捨ててあります。それをきれいにお掃除していかれます。もう二、三年続いているらしいですが、歌舞伎町の犯罪率は激減したということです。いつか国際会議で参加者にトイレ掃除してもらおうのが、私の夢です。

(十一) 愚かなまでに丁寧に生きる

私が常に考えていることですが、現代人がどうして不幸なのか、言い過ぎかもしれませんが、どうして生きているという実感が持てないのか、どうしてありがとうという気持ちが出てこないのか。それは、やはり心と体がバラバラになっているということに起因していると思います。

何度も言いますように、私たちの国、日本ほど恵まれた国はありません。こんないい服を着て、空調のきいた部屋で勉強をし、乗り物は世界一便利だし、食べ物世界一おいしいし、こんな国に、なぜ自殺者が三万人を下らないのか。何かおかしいのです。なぜうつ病になる人がごまんといえるのか。



図④

なぜ引きこもりを十年もやっている
若者がこれほど多いのか。何が原因
かと言うと、先ほどから申し上げて
いる、心と体がバラバラになっている
ことに原因があると思っています。

心と体を調和させた人づくりをし
ていく一番の確な方法が坐禅でし
た。しかし、この坐禅も、今は形ば
っかりになって、ほとんど効果がな
いと見ています。スポーツでもいい
んです。武道とか、茶道と花道と
か、本当に心を込めて一つひとつの
動きに全身全霊を込めていった時
に、心と体の重なりができるわけ
で、まさにそこに日本文化の強みがある
わけです。今はたぶんに商業主義
にしてやられて、悲しいことに心
を込めるということが忘れ去られて
いるわけです。

心と体がバラバラになることな

く、一体になることにより、少しでも幸福感が大きく感じられ、生きがいを感じられるわけです。今
はいろんなものがあり過ぎて、そこに心を置くということが非常に難しくなっています。何とかして
心と体が一体化する生き方が必要になるでしょう。そうしないと、ますます日本社会にはおかしな現
象が生じてくるでしょう。いくら法律を厳しくしても、警察力を高めても、病的な社会現象は止まら
ないと思います。

「愚かなままでいていねいに生きる」、こういうことを三つ子の魂から教えていかなければいけませ
ん。親がそれを自覚し、体験し、教示していかなければいけない。一膳のご飯を丁寧にとにかく。
一杯のビールを本当においしくいただく。そういう「愚かなままでいていねいに生きる」ことから始ま
ります。何も禅寺行って坐禅したり、お念仏したり、そういう殊勝な事をする必要は全くないわけ
で、毎日の当たり前の生活で、心と体の一体化する部分を増やしていくことです。これをやらない限
り日本社会は改まらないし、日本社会が改まらないと、世界にも平和がやってこない、そのように
考えています。

一本当に日本の役割は大きいと思っています。日本の国民一人ひとりが、もう少ししっかりした生き
方をしていくと、馬鹿な政治家は消えていきます。私たちの民度が低いから、政治家のレベルが低い
わけです。民度を高めれば日本の政治レベルが高まって、世界の文明の流れに貢献できるような国に
なっていくます。その最初の出発点がここにあると私は考えています。

『愚者の知恵』という本のタイトルの定義づけをあえてするとすれば、「自分を楽しむ能力」を向上
させるということではないかと思えます。「CSE: Capacity of Self Enjoyment」私が作った英語
ですが、これはIQに対抗して作ったもので、IQという持って生まれた素質、能力はどうしようも
ないものがありますが、そのIQが高いから幸せなわけではありません。IQが高ければ、いい学校
は行けるかもしれないけれども、IQは人間の幸福度を表さない。しかしCSE「自分を楽しむ能

力」は幸福度を表します。別に学歴が低くても、収入が低くても、CSEが高い人はいくらでもいます。

反対に世の中で毎日テレビに出ているような人でも、目立つ立場にいる人でも、CSEがものすごく低い人もいますし。人間として何が大切かというと、このCSEを高めていく、そういうことではないかなと思います。これは人として、人生の最後まで努めなければいけないことだと思います。

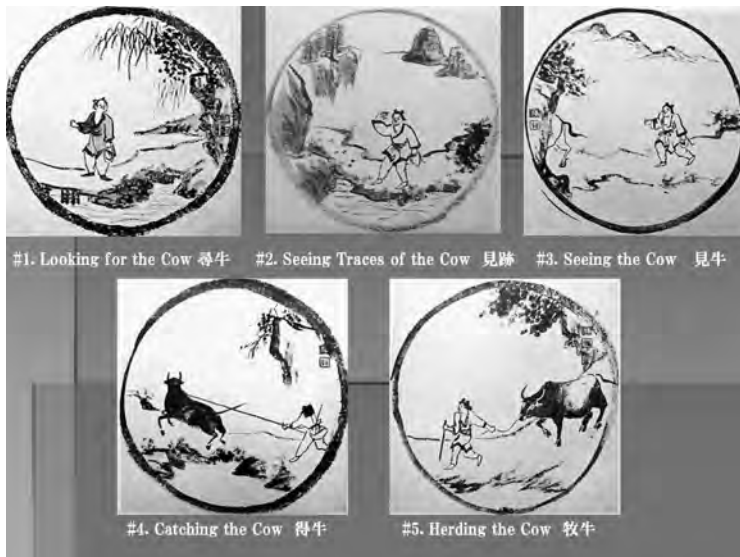
先ほど内観の話をしました。年齢には関係なく、八十歳の方が内観をして、お父さんとお母さんのことを思い出してもいいと思います。死ぬ前に冥土の土産に、親に対する思いを深めるというのはものすごく大切なことだと思います。内観は若い人がやれば、新たな生き方が出来る時間が多い分いいことでもあります。私は別に明日死ぬ人がやってもいいと思っています。自分を振り返ることほど大事な営みはありません。

(十二) 大馬鹿野郎の「痴聖人」の悟り——十牛の図に学ぶ

ここからよくご覧になる「十牛の図」(*図⑤、図⑥)についてお話しさせていただきます。これは禅宗の雲水向けの教則本みたいなお話です。唐の時代の廓庵というお坊さんが禅の修行の段階を十コマ漫画で表わしたものです。

最初の図は「尋牛」で、牧童(雲水ですが)がいなくなった牛を探している。第二図は「見跡」で、牛の足跡を見出して、「ああ、こっちに牛がいるのだ」と、方向性が見えてきました。実は第一図「尋牛」から第二図「見跡」に行くには、ずいぶん時間と苦労があったと思いますが、方向性が見えてきます。自分の学問とか、事業とか、若い時には、その方向性が見えてくるにはずいぶん時間がかかります。

そして第三図、「見牛」では実体が見えてくるわけです。しかしまだお尻と尻尾、ごく一部しか見



図⑤

えませんが、自分が追いかけていたものは幻想ではなかったと、実体があったという確かな手応えを感じた喜びの瞬間でもあります。それを必死で追いかけて行って、第四図、「得牛」に入っていきます。格闘の末、牛を捕まえます。油断をすれば牛はいつ逃げるか分からないわけですから、ロープはピンと張っています。緊張の瞬間です。

これは平均的な年代は三十代から四十代の人生というところでしょう。自分が選んだ職業で手応えを感じた時で、「よし行ける」という時でしょうか。しかし油断大敵で、いつつまずくか分からないという緊張感があるところです。第五図「牧牛」にいきますと、牛はしおらしく素直に手綱を緩めても付いて来てくれ、相当に職業と自分が一体化してきたというところです。



図⑥

この牛を何と理解するかは、銘々自分に当てはめて考えていただいた方がいいのですが、もともとこれは「禪の悟り」です。牛を何に譬えてもいいわけで、いろいろ思ってもらった方がいいと思います。学生や若者に話す時、恋人探しに譬えてもよいわけで、恋人の足跡を見つけて、あそこになっていた。そして、必死で追いかけて捕まえてプロポーズしたところぐらいで、「良かったねえ」という状況と言えるでしょう。しかし、「後で後悔が待っているよ」と言いなくなる状況です。(笑)

第六図「騎牛帰家」に行くと、もう牛は放っておいても家への帰り道を知っています。牛の背中で篠笛を吹いて、楽しく家路に着いているところで、本当に自分と職業が一体化してきた境地にあります。学問で言えば自分の学説というものが認めら

れて、自分の人生と学問がピタッと一つになってきた。そういう境界にいるとも言えるかもしれない。しかし、まだまだ牛というこだわりがあるわけです。

第七図「忘牛存人」になると、ここからが「みそ」ですが、牛が消えています。

実は「人類は宗教に勝てるか」(NHKブックス)に述べている一つのポイントは無神教的コスモロジーであって、宗教の形態として、多神教的コスモロジーと一神教的コスモロジーというものがあるけれども、理想的には人類は宗教を乗り越えていかなきゃいけないと言っています。簡単には言えませんが、神仏というのは外にあって崇めるものではなく、自分の中にあり、また、自分も含めた宇宙全体が神仏と言ってもいいわけで、何か教会に行かなければ、モスクに行かなければ、お寺に行かなければ神仏とつながるわけにいかないという考えはおかしいわけです。

本当は宗教は宇宙に遍満しているし、自分の心の中にも遍満しています。宗教が消える世界を私は「無神教的コスモロジー」と言っていますが、そこまで行かないと人類の平和というのは実現しないと考えているわけです。まさにこの第七図「忘牛存人」あたりから、牛が消えている。宗教が消えている。やつと本来の宗教的な境界が理解されたと言えると思います。人生には目的意識を持って牛を追いかける、牛と格闘する、牛を馴らすという、そういうプロセスが必要だと思いますが、そこには目的がなくて、目的は自由になることです。牛を忘れて自分が主人公になっていく世界が「忘牛存人」です。

第八図「人牛俱忘」になると、人間も牛も消え去っています。第七図の人の心境が深まっていった場合、一切ささぎるものが心から消え去るといって心を表していると理解しています。いわゆる禅でいう無の境地です。空の境地です。別に坐禅をしなくても、本当に自分の道を極めた人はこういう境地を持つているように思います。

私はどこかの本に書いていますが、今の世の中、宗教家よりも在家の方、一般市民の方が悟っ

ている人が多い。明らかに多いように思います。別に成功者がそうであるということではなく、成功していない人も、こういう境地をしつかりお持ちの方はおられます。よくそういう方との出会いがあって、こちらが教わることが多い。恐るべしは坊さんじゃなく、庶民の中の賢人とでも言える人です。そういう心持ちに達している人が自然を見た場合、あるいは社会を見た場合、第九図「返本還元」になり、当たり前の世界を見ながら当たり前でないものを感じ取っているわけです。先ほどの心と体がピタッと重なってくる状態で、物と心が一体化してくると言ってもいいと思います。今まで見ていた風景と一つも変わりませんが、同じ風景が光って見えるというか、そこに生きている喜びが実感される心境です。心のお掃除ができています。もう知識もいらない、名譽もいらない、金もいらないというところに一度入っているわけで、そこから見える風景はどこまでも美しくありがたいもののように見えています。

最終的には第十図「入塵垂手」も、メタボのおじいちゃん姿ですが、人から見ると、この人、賢いのか馬鹿なのか、悟っているのか悟っていないのか、俗っぽいのか清らかなのか分からない。カテゴライゼーションを超えたような人間になっているところが理想ということです。

禅宗に、こういう言葉があります。一般的にはこういう概念はなかなか理解されませんが、「痴聖人」という存在です。聖人は結構存在していますが、「痴聖人」になる人はなかなかいません。日本だけではなく、宗教の歴史を繙いてみると、どこの宗教にも「痴聖人」的な人はいるわけです。これからの世の中を牽引して行く人は、この「痴聖人」だと思っています。ただ単に無知な人間としての「痴聖人」ではなくて、その背景には、実は大変な知性を持っている人が「痴聖人」になってくれた時に非常に大きい役割を持つと思います。

今の知性人は「知性人」で終わっているからもう一つ働きが出てこない。この人が大馬鹿野郎「痴聖人」になってくれた時、大変大きな働きを見せることができると思っています。それが下座行で

す。そういうことを評価する世の中になってほしいと思っています。

(十三) 法然——時代を切り開く力——

私は法然上人の研究から長く離れていて、もう法然の専門家ではありませんが、たまたまNHKが平成二十一年四月から一年間、「法然上人八百年遠忌」に先駆けて、一時間番組を十二回に分けて制作する事になり、私を受け持つことになりました。今、大慌てで復習しているところです。私は個人的にも法然が大好きです。私がアメリカで比較宗教学という学問を勉強して、博士論文として誰について書こうかとずいぶん迷ったことがありましたが、その時に法然を選びました。法然が、アメリカの仏教学会でほとんど評価されていないという点と、キリスト教と仏教の対話という観点からも非常に面白い人物であるとの判断から博士論文のテーマとして取り組んだ経緯があります。

法然が、日本の思想史の流れを変えたという意味でも無視はできない非常に重要な人物です。それ以来、英語で“*Delegate Monk*”という本を書いてカリフォルニア大学から出したり、講談社から『法然対明恵』という本を出したり、法蔵館から『明恵』という本を三冊出版するに至りました。法然は、日本思想史上の重要な人物なのです。

この前、皆さんもよくご存知の宗教学者の山折哲雄さんにお会いしました。その時に、山折先生がつかつかと私の側に来られて、「町田さん、俺なあ、親鸞さんにはあんまり会いたくないんや」とおっしゃる。山折哲雄さんは浄土真宗のご出身なんです、「でも法然さんには会いたいなあ」とおっしゃっていました。山折さんがそのように言われるまでもなく、やっぱり法然さんは非常に人間的な幅のある魅力のある人です。

私はこのNHKテキストの副題を「法然——時代を切り開く力——」というふうに書いています。それはこの人は平安末期の律令制がガラガラ音を立てて壊れていく混乱の時代に、全く新しい価値観

を生み出した人です。それまでの奈良、平安仏教とは違う、「南無阿弥陀仏」で救われる世界を説いた人ですが、当時、それを言うのは相当勇気がいったと思います。今でこそ「ああ、そうかあ」と思えますが、当時の戒律重視主義、鎮護国家の仏教が圧倒的な政治力、経済力を持つている中で、「そんなものはいらん」と言うのは相当な勇氣のいることではないでしょうか。だから、法然は弾圧されて四国にも流されています。今で言えば一番恐ろしい勢力に対して向こうを張る命がけのことだったと思います。大変な事をやってのけた人であり、新しい時代を切り開いた人だと思っています。

法然は理屈で始めた人じゃない。この人は将来、天台座主になるのではないかというぐらい秀才だったわけです。法然が「南無阿弥陀仏」だけ言ったら救われます、もうそれだけでいいんですと切り切るその背景には、法然自身のすごい体験があるわけです。法然は体験の人です。浄土宗のお坊さんはそういうことを絶対言いません。禅道の本を読んで、お念仏の勉強して、専修念仏を始めたというようなことしか言いません。法然はそんなものではなく、すごい体験を持っています。それもイメージ体験です。

法然が晩年になり、「愚痴に還りて極楽に生まる」と、誠に味わいのある言葉を残しています。賢いうちは極楽に生まれられない、賢いうちは駄目で地獄に行きます、と言っています。大馬鹿野郎にならないと、極楽に生まることができないそうです。

(十四) 妙好人——イワンの馬鹿的要素の必要性

鈴木大拙が取り上げて、一躍注目された浅原才市さんへ一八五〇—一九三二・石見の国に生まれた下駄職人、浄土真宗の代表的な妙好人——行状の立派な念仏者、篤信の信者も非常に味わい深い詩を残されています。下駄職人をしていた方ですが、「びんぼうが たから、わしが たからは なむあみだぶつ」と言い、大変な貧乏だったけれど「私は悪いばかり あなたは良いばかり 南無は慙愧

で あなたは歓喜 慙愧 歓喜の なむあみだぶつ」と言っております。

これは神人一体の境地です。坊さんでも言えない。ローマ法王でも言えない境地です。やはり日本の仏教の伝統というのは、庶民の中にこういう境界の人を輩出していました。今は残念ながら妙好人はほとんどいません。ほとんど文字も読めるか読めないかというような状態の人が、ここまで深い境界に入って行かれるというのは、やはり仏教の伝統は恐るべしと言えます。

浄土真宗に妙好人はほとんどいなくなりました。別な形の妙好人はまだおられますが、必ずしもお念仏を通じてそういう境地に達するわけではありません。妙好人に近い人は現代にもやはりおられると思います。私は、こういう宗教観を、特にユダヤ教、キリスト教的な世界に紹介していきたいと思っています。賢いだけでは駄目。清らかなだけでは駄目。この「痴」ということの価値を理解しないと、文明は共存し得ないと考えています。

また、これは今さら紹介するまでもない、誰でも知っている宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」ですが、本当に賢い人は馬鹿になれる人です。何か鼻にかけていたり、いろんな知識を披瀝したりしているうちはまだ賢くなく、「ちよつとボケているんじゃないの」というぐらいの人が本当に賢い人であるということ。なかなかこういう境地にはなれません。本当にボケてはいませんが、頭脳は極めて明晰です。やはり組織のトップに立つような人は、ちゃんとも的是は見ているけれど、「ちよつとボケているんじゃないの」というぐらいの人の境地でないと、組織というのは発展していかないように思います。よくいろんな所で経営者の方々に会いますが、本当に優れた企業というのは、トップが「イワンの馬鹿的な要素」を持っている人の場合が多い。やはり下座行を身に付けておられますし、非常に謙虚で徳を積んでおられます。そういう要素が自然に企業の風土に反映されてくるのではないかと思います。

「雨ニモ負ケズ 風ニモ負ケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ」のあとの「丈夫ナカラダヲモチ 慾

ハナク 決シテ曠ラズ イツモシツカニワラツテイル 一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ」とあります。この丈夫な体を持ちというのが大事なところですよ。やっぱり人間ですから衰えてきます。けれどもこの高齢化社会において、私たちが一日でも長く健康で暮らしていくというのは本当に家族にとっても大事なことですし、自分の幸せにとっても大事なことです。

私は健康管理というか健康維持というのを非常に大事に考えております。日頃は玄米食を食っています。日本人の食生活、日本食というのは本当に素晴らしい食文化を持っていますが、どうもこの頃、特に若い人たちの食文化がおかしくなっているのではないのでしょうか。どうしてもメンタリティが崩れてきたように思います。

(十五) 自然農法、循環農法に学ぶ

最近、大分と熊本に自然農法をやっている二軒の農家を訪ねました。感心することは農薬ゼロです。肥料は使っておられませんが、完熟堆肥です。豚の糞と雑草を混ぜて二年ぐらい発酵させ、サラサラの状態にして、手で持っても臭くないし、手に付かない完熟堆肥をお使いになっています。その農家の稲は、稲穂が風速五十七メートルの台風でも倒れたことはないと言っていました。すごく丈夫な稲を栽培されています。お隣りで普通の農法をやっている田んぼの稲と比べると、この自然農法、循環農法の稲穂は一・五倍ぐらいの丈があり、台風で倒れません。お隣りから害虫が飛んできて病気になるかと思えば、全然関係なし。いったん病気が出ても跳ね返してしまふ。絶対に自分の田んぼで広まらないそうです。一反あたり、普通十俵というところが、平均十五俵取れるそうです。採算性も十分にあります。

特に私が感心したのは、大分の赤峰勝人さんという方の自然農法のやり方です。草の中で野菜とお米を育てていますが、田んぼも草だらけ、畑も草だらけ、全面草の中ですよ。また、その赤峰さんの面

白い考えに感心しました。逆転の発想です。哲学者です。彼の農法は普通の農業では敵視している菌も虫も草もすべてが味方であり、こういうものが相互に作用して、畑を作ってくれるんだという考えです。神さまのような存在で、存在するもの一切を敵視せず、大地を育てるのは菌で、虫も天敵を次々やつつけてくれ、田んぼの中もドジョウとかウナギとかがいっぱい泳いでいるわけです。草は刈りこんで、鋤込んで、肥料にしていけるわけです。また完熟堆肥の原料にもなるわけですが、そのすごさにびっくりしました。

そういう田んぼに行くと、非常に良い「気」が出ています。私は多少「気」を感じることができません。本当に癒される「気」です。二日酔いの時にあぜ道で座っていたらすぐ治るとおっしゃっていました。それほど健康な田んぼとか畑とかで育った健康な作物はすごい良い「気」を放っています。あれはおそらくうつ病の人が、一日座っていたら相当気分良くなると思います。それが本来の農業の在り方です。

それで赤峰さんの所には全国の医者に見放されたような病人が行くようです。赤峰さんの所の作物を食べていたら治っていきます。完全な健康的な食べ物を食べるということです。この方はお百姓さんです。お百姓さんだけでも不思議な人で、私より年上なだけでも、健康で輝いている。一日中、畑で働いても疲れないそうです。さつきのワクワクする心を地で行く人で、楽しくて楽しくて楽しくてしょうがないという方です。お金もかからない、農薬も使わない、化学肥料も使わない、全く元手のかからない農業で儲かってしまうと言っていました。作物は全部、宅配で全国に配送しておられます。今日に至るまでにはずいぶんご苦労されたと思いますが、赤峰さんのような循環農法であれば、本当に健康な食べ物ができますし、日本の農地も、大地もよみがえります。

私は、この循環農法を発展途上国に紹介したいと思っています。発展途上国にも活かせる循環農法だと思っています。発展途上国の貧困をたくさん見てきています。農薬が買えない、肥料が買えないの

で、貧しい農業をしているというが、それは思い込みであると。農薬とか肥料を買わせるのは先進国の大企業で、二重にも三重にも搾取の構造ができていたと思いました。

発展途上国の貧困の中に日本で成功している自然農法、循環農法を紹介できないかと思って、私は大学院生を連れて、赤峰さんの所へ調査に行きましたが、本当に目から鱗で、びっくりしました。私たちはやはり正しい物を食べて、健康になっていく責任があるわけです。そのためにも紹介できないものかと思っています。「雨ニモ負ケズ」の終わり「ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ ソウイウモノニ ワタシハナリタイ」という人口に膾炙した有名なフレーズですが、こういう境地になっていきたい。それでこそ自分も救われるし、世の中も救われると思っています。

〔十六〕「風の集い」と「健康断食」——心身両面の健康を——

最後に、若干、私の活動を紹介しておきます。私は海外から戻って、「風の集い」という会を主宰しています。もう八年ぐらいやっています。「ありがとう」という、宗教でも何でもない言葉ですが、この「ありがとう」という言葉の力に本当に惚れこんでいます。この「ありがとう」を大きな声で発声することの効果というものを本当に目撃してきました。頭痛持ちの人が頭痛が治ったり、うつ病の人が徐々に治っていきます。この「風の集い」を東京、名古屋、京都、岡山、福山、広島で開いております。詳しいことは私のホームページにスケジュールを載せております。ぜひご覧下さい。

ただ「ありがとう」という音が重なってくると、楽器の音色とか、鳥の声とか、あるいはお経の声を聞くという人が三分の一います。いつも「町田先生お経を上げていたのですか」と言われます。

「いや、私はお経なんか上げていないよ。一緒にありがとうをやっていただけだよ」と言うのだけれども、そういう声が聞こえてくるらしい。人間の声の力というのはすごいと思います。

もう一つは健康断食というのをやっています。これは週末を利用して金曜日の夕方に集まって日

曜日までやります。二日間、水だけで過ごして、三日目に大量の野菜サラダとふろふき大根を食べていただく、一時間以内に全員が宿便を出します。この健康断食が思いのほか効果があると確信しています。私はこれを、必ず温泉のあるホテルで行うのですが、最後、温泉に入っていたと皮膚が透明になったようにキラキラしてきます。一週間禅寺で坐禅するよりもはるかに境地も良くなり、体が飛び跳ねるように軽く感じます。それは心のストレスが消えるということ、宿便を出すと、フィジカルな面とメンタルな面から両方攻めていきますからきわめてよい効果が出ています。

この健康断食は毎月のようにやっています。キャンセル待ちの方も多くおられます。何も食べないけれどもお金を頂いています。ホテル代とかに使いますから儲かりませんが、世のため、人のため、いいと思って私は続けています。一人でも多くの方が健康になっていただく、心身両面から健康になっていただくという、その喜びを感じながらやっております。もしご縁があれば皆さんもぜひご参加くださればいいかと思えます。ご清聴ありがとうございました。

「風の集い」「健康断食」の詳しい内容については、町田宗鳳先生のホームページをご覧ください。」

（編集者注…本稿は、平成二十年十一月十五日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。）